

第十章 余熱

余熱

TIPLLOの創業三十周年記念セミナーとパーティーは一九九五年二月二十四日に東京新宿センチュリーハイアットで円満に開催された。四時間半も続いた台湾の知的財産権近況報告セミナーには六〇名以上の受講者の一斉参加によって会場がぎっしり埋まっていた。六時以降のパーティーでは、計八五〇名程の来賓の参加で更に大盛況となった。父はこの催しのため半年ほど前から細心の準備を始めてきた。神戸大震災発生直後でショックから立ち上がる最中にも関わらずに熱心に記念パーティーへ参加される大勢の来客に深い感激を抱いた。申し訳ないほどの感謝感激の記念に当日頂いた御祝儀を全額神戸の被災者に寄付させて頂いた。父の感情の波がセミナーの冒頭挨拶から次第に高揚し、丹念に用意した原稿の通りに式辞を述べながら、「時は三十年・・・」と来た途端に、つい万感交々至り涙を堪えずに暫く言葉に詰まった。相変わらず涙腺が発達する父さんだなど、司会をする僕は少し惑わされながらハンカチーフをそっと渡してあげた。ステージに立っていた父は、紅潮した顔と痩せこけて傾いた骨組みが目立つように心細く見えた。神経質な息子の目に映るここ三年以来の容態は、既に僕の不安と苛立ちの原因になっていた。

長年の過労が五十代後半になった父の体を悪魔のように容赦無く蝕みはじめた。全然年に見えないと羨まれたはずの父が、急に年寄りの気配を感じさせた。

最高の記念パーティーを終え、台北に戻ったら丁度当地の旧暦新年を迎える。父はほっとした矢先にとどっと出た疲れが徒になり、大晦日の深夜に異常が始まった。意識が次第に混乱し、つい会話不能な

ほどに意識混沌になった。二十四時間後には救急診療室から救急車で台北近郊の総合病院に運ばれて、MRI検査で脳出血症状が確認された。お正月休みの肌寒い夕暮れ、担架に担がれた父を眺めてもう駄目だと怯えた僕と家族たち。しかし、幸い出血の範囲が微少で、手術は不要だが安静観察のため、至急入院を認めてくれた。救急診療室には大勢の脳出血患者が犇めき、気の毒な世界だった。運良く早くもそこから脱出でき、家族一丸となって奮い立たせながら、父と三週間ほどの入院生活を頑張った。

静養の甲斐があり、二週間目以降は、父は車椅子に乗って移動できるようになった。言語障害や手足の不自由等も全然無くて、意識の回復も早く進んだ。

しかし、それまでは厳しくて恐かった父が、妙に可愛く僕の目に映りはじめた。それまですねを齧ってきた親が、病気で倒れ、またその精悍さが年月と共に取れたのを見て、不思議な愛情が込み上げる。父を介護するうちに、いやでもそのぼろけた骨組みを自分の腕で感じて、その肌のかさぶたを指で受け止める。痩せたね、父チャン。すっかり肉付きの落ちたほっそりする太股と脹脛に布団を引くときに気づく。何故か目の前に横たわる親は、今更自分の愛情を痛いほど誘う。

しかし、父は僕たちに世話を焼かせない。三週間でもう退院出来るまでに回復した。それ以上長引けば、今度は家族たちが先にのびてしまうのを配慮するかのようになつたと回復して退院した。

その後半年間は、事務所も正常出勤し、普通は週一回ほどのリハビリぐらいのシンプルライフ。体調も前に劣らないほどに徐々に向上した。命拾いした念もあり、父が張り切る一方気持ちだけペースを少し緩め生活を楽しむよう心がけたようだった。

しっかりと回復してくれた父の御陰で、僕にはその後二年間ほどさらに緊密な親子の職場と家庭の

共同体験を与えられた。

だが、ペースを緩めたはずの父が、脳出血から立ち直った後の二年間は、早くもこの世を立ち去る事を心配するかのようになり、大変濃密に生きた。

まずは三人息子が九五年六月からの一年間で全員次々に結婚。

九五年八月には一五〇人のTIPLLOスタッフを率いて九州へ旅行した。帰ってからすぐ彭明敏先生の総統選挙の予選活動の応援進行。同時に台北弁護士会館の購入のため寄付と根回しで立ち回る。年末の立法委員総選挙に対して民主進歩党の候補者を支持する活動を展開。

九六年は総統選挙戦で彭明敏先生の応援活動に全力投入。四月は敗北した彭先生を会長に推して支持者らと「建国会」を設立。同年十一月のAPAA台北大会の開催があり、三ヶ月前より精魂込めて準備に取り組んだ。努力の甲斐あって九〇〇名以上の参加者が出席したほどの大盛況に成功。年末には「建国会」主催の「台湾国家発展会議」に協賛。

九七年四月に、初孫の正虎が出生（次男志青の子）。五月民間司法改革基金会の成立とともに初代会長に就任。同月民間司法改革基金会等団体を結成し、全国司法改革会議の開催を李登輝総統に要請。間もなくマレーシア・クアラルンプール開催のIPBA大会へ参加。六月には、イギリス・オクスフォードバリオル大学院にM.S.Lin会館の開館式に参加する予定。

この濃密で創造的な二年間を、父は存分に燃え続けた。燃え尽きようとしたほどに。かつて無い疲労感に襲われたのは、九七年の春先だった。

死の有る風景が何時しか本当に父を待ち受けていた。